

児童健全育成賞（数納賞）奨励賞

社会的養護の子どもたちを育てて

広島県呉市

稲垣ファミリーホーム 代表者 稲垣 りつ子

平成21年4月に、ファミリーホームが事業化する形で法定化された。制度化の翌年の2月に、広島県内で初のファミリーホーム、稲垣ファミリーホームを開設した。6人の子どもと管理者と養育者、それに3人の補助者で運営することになった。

ファミリーホームを開設した理由

日本の里親委託率は、先進国でありながら世界的にも低く、施設偏重の国の政策に、国連・子どもの権利委員会から勧告を受けたにもかかわらず変わらなかった。以前から私はこの現状に憤りを感じていた。

ファミリーホームが制度化される以前に、「ファミリーホーム全国連絡会」に籍を置いていた私は当時の会長と共に厚生労働省や、厚生労働省委員の国会議員たちに里親制度の拡大を訴えてきた。時には衆議院会館に赴き、国会議員に要望書の提出や対談をしてきた。他のメンバーや顧問の活動もあって、ファミリーホームの会が出来て4年後には、ファミリーホームが制度化された。そこで私は早速ファミリーホームを開設するために県に申請書を提出した。

当初、広島県の場合、ファミリーホームは施設に準ずるということで、第二種社会福祉事業にも関わらず、第一種社会福祉事業の書類基準を基にして作成するよう要求された。大量の書類に四苦八苦しながら、やっとの思いで約一年かけて認定された。ファミリーホームの場合、

第二種社会福祉事業なので、届出をすることにより事業経営が可能であるはずが、審査が厳しく、当ホームに続くファミリーホームがなかなか開設しなかった。そこで、ファミリーホームは里親の部類に入っていた私は、参議院議員に相談をした。参議院議員や当時の副厚生労働大臣が日を変えて視察に来てくださり対談が実現。

平成23年第14代厚生労働大臣のとき、参議院議会で我が家に視察においてになった参議院議員が「ファミリーホームは施設か、それとも里親か」と質問された。また、ファミリーホームの要綱が曖昧で、明確でないことを指摘された。それに対して厚生労働大臣は「ファミリーホームは、里親が大きくなったものであり、施設が小さくなったものではない」と位置づける回答をした。これにより、厚生労働省によってファミリーホームの「理念の明確化」が発表され、「里親及びファミリーホーム養育指針」という形で指針を里親と一体のものとして示された。更にファミリーホームは、児童を養育者の家庭に迎え入れて養育を行う家庭養護であるという理念の明確化を正式文章として出された。

これを受けて、広島県も一昨年からファミリーホームが立続けに3箇所開設、当ホームを含めて4箇所になった。

「現状と実践」

稲垣ファミリーホームの子どもたちは、殆ど

が発達障害を持っている。ダウン症をはじめ、自閉症、注意多動欠陥症（AD/HD）、知的遅滞等、養育困難な子どもたちだ。ゆえに、関係機関との連携が必要不可欠であり、呉市の子育て支援課をはじめ、呉市療育相談センター、児童ディサービス事業所、まなびの教室、心療内科・精神科等々と連携を取りながら子どもたちを当ホームの職員が付き添って通所している。

① A子さんの場合

A子さんは、中学一年生の時にIQの数値が68で我が家に措置された。そんなA子さんが高校に入ったころには98までIQの数値が上がり、さすが里親宅での養育は素晴らしいと喜んだものだった。しかし、その彼女が18歳で高校を卒業、就職して措置解除、自立して家を借りて一人暮らしを始めた。すると数ヶ月後には1ヶ月働いた給料を3日で使い果たし、生活も昼夜逆転して仕事にも行けなくなり、家賃も払えなくなった。元里親である私が生活費等の肩代わりをせざるを得なくなり、負担が大きくなって困ってしまった。そこで、当ホームの管轄の児童相談所の所長に相談すると、18歳を超えているので、本来は無理なのだが、特別に発達検査をしてもらうことができた。すると、元の68にIQの数値が下がっていた。信じ難い現象だった。しかし、IQが68ではボーダーラインということで療育手帳は取得出来ず、困り果てた末に、ある方のアドバイスで精神障害手帳を取得することにした。

彼女の場合、幼少時代に、実親からの虐待があった。児童養護施設に入所してからも虐待があり、我が家に措置変更された経緯がある。彼女の場合は解離性障害を持っていた。3箇所の精神科に受診して、最後の一箇所で、やっと精神障害手帳を取得できた。そこに至るまでに約一年経過した。手帳を取得した結果、グループホームに入所することができた。入所できたお蔭で、生活管理をしてもらい現在は職場にも復帰するまでに至っている。

当ホームは、子どもたちが就職して自立していくことが大切だと思って育ててきた。しかし、

愛情をかけて育てた結果、IQの数値が上がり障害手帳が取れなくなったとき、実親が頼りにならない子どもたちにとって、IQが上がることを手放しに喜んでいいのか迷う私がいる。

生きていく中で障害手帳の取得は、ボーダーラインの子どもたちにとって切実な問題である。そこで呉市長に会って、ボーダーラインの子どもたちを含め障害のある子どもたちの自立について話し合った。

翌年、呉市長は発達障害を含め若い人たちが就職できず生活保護を受ける人が増えている現状に苦慮され、東京のある会社の社長と対談、静岡県沼津市にもある系列の会社にも視察に行かれたようだ。

そして、昨年10月には障害者総合支援法に基づき、就労移行支援（職業訓練）・就労継続支援A型（雇用形式での職業訓練）サービスを提供し就労困難者の一般就労への移行を支援する会社を呉に招き、市の使用していない建物を提供して開設されている。障害手帳を持たないニートや生活保護者でもOK!の会社だそうだ。

私も呉市長からの話を聞いて、毎月の説明会や親の会に参加している。その会社の社長とも会って話したり、所長に事業の提案をしたりしている。

② B君の場合

私たち夫婦が里親に登録されたのは昭和59年3月だ。9月に初めて里子を受託する。9歳の男の子だった。その子の生い立ちは彼が5歳の時に実母が病に倒れ、実父は行方不明で実母の兄の家で育つことになった。

叔父夫婦の所で8歳まで育てられたが、叔母との仲がうまくいかず毎日虐待を受けていた。毎日食事はご飯と漬物だけだったようだ。その家の実子には豪華な食事だったと我が家に来たときに彼から聞いたことがある。テレビも見せてもらえず、午後7時過ぎには消灯。無理やり寝かされていたようだ。隣の部屋から漏れる明かりと笑い声、楽しい団らんが羨ましかったとも言っていた。午前4時頃には目が覚め、みんなが寝ている間に隣にあるテレビのスイッチを

入れて見たが放送されていなかったり、映っているときは音を消して顔をブラウン管に近づけて見ていたと話してくれたこともある。言うことを聞かないと叔母から仕事で使用する竹のような細い棒で、毎日のように頭や体を叩かれていたようだ。

今になってわかることだが、彼は注意欠陥多動障害だったと思う。

毎月、発達障害の研修会に行っている私も対応に苦慮している子どもたちである。当時、まだ発達障害という言葉さえ知らない叔父夫婦にとって、一刻もじっとしない、盗癖はある、嘘はつく、家出はする子に対してどう対応しているのかわからなかったのだろう。

B君が原因で、夫婦仲も悪くなり思いあぐねて叔父が児童相談所に行き一時保護所に保護された。

そんな時、我が家に里子としてどうかと児童相談所の担当者から話がきた。会ってみると、お調子者でよくしゃべる子で私に対して「先生」と呼んだ。担当の職員と私と3人で話をしているときも、座っている椅子を右左に回して一刻もじっとしていられなくて担当職員から何度か「じっと座っておけないのか！」と注意を受けていた。それでも彼は嬉しそうにいろいろなことを話してくれた。ここに来てよかったこと。三度のご飯におかずがあって美味しいこと。風呂に毎日入れること。毎日先生や仲間と話したり遊んだりできること。毎朝2kmのマラソンをすること。ある先輩は、ここを脱走して先生たちが顔色を変えて探し回っていたこと。何でこんなに楽しい所を脱走するのか理解できない等々、次から次へと話してくれた。そして最後に一緒に卓球をして帰ることにしたのだが、彼の「また来てね～」の言葉が帰りの車中でもいつまでも耳に残っていた。

3日後の土曜日に一泊予定で我が家に来てもらった。するとこちらが何も言わないのに「お母さん」と私のことを呼んだ。私はびっくりして「無理にお母さんと呼ばなくていいよ。おばさんでいいのよ」と言うと彼は首を横に振って

「お母さん」と再度呼んでくれた。うれしかった。私は里親申請するときの希望欄には女の子で3歳前後の子を希望と書いていたが彼と会ってそんなことはどうでもよくなった。

初めて会って3週間後には我が家に受託された。生活してみてもわかったのだが非常に食事が遅い、その理由として口中の歯が全部虫歯になっていて痛いことがわかりすぐに歯科に通院。歯並びも酷く悪かったので歯の矯正もした。一番困ったのが学校での多動。学校の物をよく壊し当時の教頭先生には「元気なお子さんで」と言われ、それ以来大変お世話になった。もちろん3年4年の担任の先生には何かと迷惑をかけ、時には児童相談所に一緒に行ってもらい相談したこともある。

彼が20歳の時に第43回全国里親大会で体験発表したことがある。当時教頭だった先生が校長になられ彼の体験発表を会場まで聞きに来られ立派になった姿に感動の涙を流されていた。そして我が家に初めて来たときの3年4年の担任の先生とは、それ以来今日までお付き合いがあり、ご夫婦とも教師ということもあり、退職された今でも当ホームにいる子どもたちの支援をさせていただいている。我が家に来た子は、どの子も担任の先生には恵まれている。ありがたいことである。

③ C・D姉弟の場合

もう一組の里子は、18年前にさかのぼる。

当時、児童養護施設に措置されていた姉弟が、夏冬の季節里親として、家庭を体験するために1週間、里親家庭で過ごす事業があり我が家に来た。弟のC君は、我が家に来た早々に、家のありとあらゆるところを物色し始めた。それには、さすがの私もビックリした。慌てて制止し、よそ様のものを物色しない、触らないよう注意をした。施設に帰る前日に彼が寝た後、彼の着替え等を鞆に入れようと開いてみた。すると我が家の電池、ボールペン、鉛筆、便箋、ものさし、私のアクセサリ等の宝石、その他諸々が入っていた。私はそっと取り出し、それらを出るだけ元に戻し、大切なものは鍵付金庫に納めた。

今まで何人かの施設の子もたちが来たが、このようなことは今回が初めてだった。翌日、叱ると気まづくなり、居づらだろうと思い、怒らずに「我が家のものは元に戻しておいたからね」とさり気なく伝えた。彼は、悪びれたそぶりもなくケロッとした顔をしていた。その一方で人懐こくって、とてもかわいい少年だった。

よほど楽しかったのか次の年も彼らはやってきた。その時は我が家の物を物色することもなく、楽しく1週間を過ごしていた。児童養護施設に帰る時は、毎回床柱に抱き付いて「施設に帰りたくない！」と大泣き。その都度、指を一本ずつ外して、抱きかかえて車に乗せて施設へと送った。着くころには、泣き疲れて寝ていた。起こした途端、またもや「帰りたくない！」と泣きながら大暴れした。すると、それを見ていた施設長が「そんなことするんだったら、二度と里親の所へは行かさんぞ！」と大きな声で怒っていた。その声を聴いて、彼は泣き止み、走って施設の中に入って行った。毎回辛い別れだった。私も施設を出ると、我慢していた気持ちが緩み、涙が溢れ出て、フロントガラスからの景色が見なくなるほどだった。

一方、姉のDさんといえば、よく気付く良い子だ。弟のやんちゃ振りに自分がしっかりしなくてはと常に気が張り、弟の分まで頑張ろうとお手伝いや勉強も人一倍頑張っているようだった。来るときは、とても明るく楽しそうなのだが、施設に帰るとい日は、暗く落ち込み、貝のように口を閉ざし、能面のような表情で、車窓の一点を見つめ、言葉をかけても一言も発さない。施設に着き、職員を見ると途端に、にっこり笑顔で「先生、ただいま〜♪」と、私たちに挨拶もせず車内から出て施設へと消えて行った。そのギャップに、私たちはビックリした。

それ以来、我が家に来るたびに体に変化が表れるようになった。それが、だんだん酷くなり、帰る前日には失禁までするようになり、それでも本人は気が付いていない様子だった。児童養護施設に帰りたくないのを一生懸命我慢しているのが痛いほど分かった。

毎回辛い別れをしなくてはならず、これは虐待と同じだと私は思うようになっていた。

ある日、Dさんが「なぜ里子のお兄ちゃんはこの子になれて、私たちはなれないの？」と聞いてきた。それで、子どもの管轄の児童相談所に相談してみた。我が家に委託してもらえないかとお願ひしたが、当時の子どもの管轄の職員からは相手にしてもらえなかった。理由は実親だった。「必ず迎えに来るから」と言ったことだった。しかし5年以上、実親からの連絡は一度もなかった。

小学校6年生頃には、ストレスの症状が益々ひどくなっていた。私は、彼女のことが心配でたまらなかった。その時すでに「里親さんの子になりたい」と言ってから3年以上も経過していた。その間に何度も車で高速道路を走って片道2時間半以上かかる管轄の児童相談所へお願ひに行くのだが事態が動くことはなかった。

何度お願ひに行ったことか。その都度、子どもたちの顔を思い浮かべては「ネバーギブアップ！」と自分に言い聞かせていた。

そこで、交流のあった大阪の家庭養護協会に相談してみた。更に家庭養護協会を通じて厚生労働省の職員に話を聞いてもらった。すると厚生労働省から、子どもの管轄の児童相談所に問い合わせがあったようで、急遽担当職員が施設に行ってDちゃんに里親の家で暮らしたいのかを聞いたそうだ。

しかし彼女は「別にどちらでもいい」と答えたらしく、稲垣は嘘をついていると判断され、児童相談所の職員から「もう少し、おとなしくしててください」と注意を受けた。

私は、ショックだった。それは児童相談所から注意を受けたことではなく、彼女が、これまでに私に言ったことや身体の症状は、いったい何だったんだということである。

(せっかくのチャンスを無にしたことにショックを受けた。)

そこで、元施設体験者で里親でもあるEさんに相談してみた。するとその方が言われた言葉に納得した。

その方は「施設の中で里親宅に行きたいかと聞かれて、本当のことが言えると思いますか？もし本当のことを言って、措置変更にならなかったら、施設の中でこの子を誰が守ってくれるでしょうか？本心を言えるわけがない！自分で自分を守るしかないのです！子どもの気持ちをわかってあげて下さい」と言われた。全くその通りだと思った。

子どもの幸、不幸は、関わった大人や、子どもの最善の利益を確保する児童相談所職員の意識の違いによって大きく左右される。私の管轄の児童相談所の職員は、C・D姉弟のことをずっと気にかけてくれて、その都度「どうになりましたか？」と聞いてくれた。そして、C・D姉弟を担当していた児童相談所の上司2名が同時期に定年退職をした時に、私の管轄の児童相談所の職員が動いてくださり、子どもの管轄の児童相談所の課長になったばかりの方に話しをしてくださった。そして、その課長は、施設で話を聞くのではなく、Dさんの学校の校長室で彼女の意思を確認した。すると彼女は「里親の家に行きたい！」と、はっきり答えたそうで、急遽、我が家に措置変更が決まった。彼女が小学校3年生の時に私と出会い、中学1年生の3学期に、やっと我が家に来ることが出来た。本当に長かった！何度、悔し涙を流したことか！

子どもの成長は待ってくれない。一年一年、良くも悪くも成長していく。大人の一年と子どもの一年では大きく違う。それを関係機関にわかって欲しかった。

彼女が我が家に来た。それまで施設では、「いい子にしていなければならぬ」「弟を守らなければならぬ」と頑張ってきたのが、私が「ここでは無理しなくてもいいよ。」と言ったことで、気が張っていた糸がプツリと切れて、退行現象が起り、幼児に戻ってしまった。学校に通えなくなり、休学することになった。

学校の先生にも説明して理解していただき、毎日のように担任の先生が「遊びに来たよ！」と言って家庭訪問をしてくださり、時には、クラスのお友達も一緒に来て遊んでくれたりして、

長期の不登校にならないように、さりげなく気にかけてくださっていた。みんなの温かい励ましのおかげで、3ヶ月後には、中学校に通えるようになった。

勉強が遅れた分を元里子の学習塾の同僚が毎週土曜日にボランティアで学習指導をしてくれ、無事に中学校も卒業、本人の努力も相まって高校も進学校に入学。勉強もよく頑張ったおかげで大学まで進学。大学生生活を謳歌していた。大学を卒業して3年後に結婚して幸せな家庭を築いている最中である。

一方、彼女の弟がどうなったかを詳しく述べようと思う。

姉が退行現象を起こすことで、一番甘えん坊だっただけに、しっかり者で一番頼りにしていた姉の変貌ぶりに驚き、甘えるチャンスを失い、その反動が盗癖、性癖と問題行動を起こすようになった。

しかし、彼を嫌いになることは不思議となかった。本当は、気持ちの優しい、可愛い子だということもわかっていたので、愛着障害故の行動だと自分自身に言いきかせていた。

幼児期に義理の父から受けた性的虐待や暴力による虐待の影響が、こんな形で出てくるとは、想像もしていなかった。

我が家に来てすぐの小学校5年生から問題行動が起きようになり、怒られるのが嫌で家出を繰り返し、学校の先生たちと私たち夫婦は繁華街や、彼の行きそうな場所を一晩中探し回ることもあった。

そんなある日、100円ライターが次々と出てきた。しかし、たばこを吸っている様子はない。我が家は家族全員が、たばこを吸わないので、吸ったとしたら、すぐにわかる。髪の毛や服にたばこの移り香が着くのでわかる。彼には、たばこの臭いがしないので、彼が吸っているとは思わなかった。そこで、私は彼に「どうして100円ライターを取り上げても、次々と出てくるの？」と質問をした。すると彼は「僕はイライラした時、火を見ることで気持ちが落ち着くんのだ。それで、公園へ行って木端や枯葉を集めて

燃やして火を見ているんだ」と答えた。

私は、それを聞いて、ゾットした。彼は我が家に措置される以前に児童養護施設で職員から怒られイライラしたらしく、学校の隣の家の納屋に放火をして見つかり施設長から酷く怒られたことがあると悪びれることなく、笑顔でそれも自慢そうに話してくれたことを思い出したからだ。

今は私との関係がそんなに悪くないけど、こんなことが続けば、いつか、関係が険悪になったとき、我が家に火をつけるかもしれない。私は自分が好きで、この子を引き取ったのだから自業自得とも言えるけど、もし隣近所に延焼したならば彼とは全く関係のない隣近所の人たちに迷惑をかける。被害を与えることになれば、死んで詫びても償えないと思った。

そんな思いを悶々と抱え、今の「日本ファミリーホーム協議会」の前の「ファミリーホーム全国連絡会」の研修で横浜市に行ったときに先輩の里親さんに相談をした。

すると、その方は「稲垣さん、里親の勘を馬鹿にしてはいけないよ！私も依然同じような経験をしたことがあるのですよ。ふと嫌な感じをしたので児童相談所に措置解除をしてほしいと言ったんだ。すると児童相談所の職員は『もう少し頑張ってもらえませんか？』と言ったんだけど、僕は『これ以上一緒に生活するとお互いがダメになるから』と言って措置解除してもらったんだ。その子は実親の元へ帰って行った。しかし1年も経たない時にその子は実親の家を放火したんだよ。やっぱりあの時の勘は当たった！児童相談所の職員の意見を聞かなくてよかったと思ったのですよ。児童相談所の職員は、年に1度か2度しか子どもと面談をしない。子どもの本当のことはわからない。しかし里親は365日24時間その子と関わっている。その里親が、ひょっとしたらという不安や勘は当たるよ！里親の直感を馬鹿にしてはいけないよ！」と、アドバイスをいただいた。

専門里親資格研修でも、大学教授から「里親さんは子どもの養育は愛情さえあればできると

思っているだろうけど、それは間違いである。関係機関と連携を取って育てていかないと、愛情だけでは子どもは育てられないよ」と言われていたことが脳裏をかすめた。

研修から帰宅して半月経った頃だった。C君の高校から早朝呼び出された。また問題を起こしたようだ。校長先生から「稲垣さんは、こんな大変な子をどうして、手放さないのですか？」と聞いてきた。

私は「実親に捨てられ、問題児だからと言って、今度は里親に捨てられたら、この子はどうなりますか？大人不信になって、大きな犯罪を起しかねない！彼が、稲垣とは一緒に住みたくない！と言わない限り、私からは見捨てません」と答えた。すると校長が、担任の先生に目で合図。彼の反省文を持ってくるように指示した。

私は、彼の反省文を読んで、ショックを受けた。反省文には「自分が問題を起こすのは、里親がウザイからである。小言がストレスになって問題を起こす。もし元の施設に帰ることが出来たら問題を起こさなくなるだろう」と書かれていた。

私は彼に「これは本心か？」と尋ねた。彼は校長先生の前で「本心だ！」と答えた。

以前、姉のDさんが、急に足腰が立たなくなったことがある。最初は冗談かとも思ったが、本当だとわかり慌てた。急いで、総合病院へ受診。レントゲンや脊髄の血液検査、脳のCT検査をしたが、異常が見つからなかった。担当医から「ストレスから下半身が麻痺したようだ」との診断が下された。

彼女に、ストレスが溜まるようなことがあったのかを聞くと、「弟が、いろいろ問題を起こすたびに、お父さんやお母さんが寝ないで探し回ったりしているのを見るにつけ辛かった」と答えた。姉も弟のせいでストレスをかなり溜めていた。学校でも、弟のせいで肩身の狭い思いを長年してきたようだ。このままでは、姉の精神にも異常をきたすと判断。思い切って、C君の管轄のこども家庭センターの職員に彼の措置について相談をした。職員の判断で、事実を確

認するため一時保護することにした。2週間の一時保護中に、部屋の窓を肘で割って脱走、見つけたが肘を何針か縫ったと報告があり、稲垣家では無理と判断し元の施設に措置変更となった。ところが施設に入所して数ヶ月経った頃、彼の問題行動は更にひどくなり、我が家ではなかった学校での服装の乱れ、遅刻、たばこも吸っていた。学校の先生が注意すると、机は蹴飛ばす、椅子で先生を殴ろうとする等、手には負えず結局退学になった。

稲垣さんの所へ居た時の方がまだよかったと担任だった先生から教えていただき、施設での様子を聞くことができた。

施設職員が注意すると、同じ施設の後輩を連れて脱走、見つけ出し施設長が注意すると、職員と子どもたちの見ている前で、施設のゴミ箱に火をつけたので慌てて職員たちがバケツの水をかけて消した。その間に逃亡したので、施設長がパトカーを要請して連れ戻してもらったという大事件があったようだ。後日、実親に彼を引き取ってもらったようだ、季節里子として我が家に来た子どもたちが教えてくれた。

現在実母とは一緒に生活をしていないと聞いている。私は今も常にどうしているかと気にかかる。人間形成で大事な時期に早期に受託できなかったことが悔やまれる。そして、私自身の力量のなさで上手く育てられなかったことが心の傷になって今ものしかかっている。

「社会貢献」

社会的養護児童は実親を当てにできない分、一人で生きていく力をつけなければならない。支援の仕方にもいろいろあるが、お金の支援以上に関係機関と連携を取りながらの自立支援が重要だと思う。

私には同じ志を持つ友人がいる。その方は、テレビ番組でも紹介されたことのあるカンボジアのノリア孤児院の子どもたちを自立支援している岩田亮子さんである。

単身カンボジアに移り住み、現在、私財を投じながら子どもたちの先生であり母であり子どもたちの自立援助に力を注いでいる。

我が家は、毎年カンボジアのノリア孤児院の子どもたち数名を招き、数日間宿泊していただき我が家の子どもたちと交流をさせている。今年も10月には岩田亮子さん率いる二人のノリア孤児院の子どもたちが来日。3泊4日の予定で我が家に滞在する。そして小学校の校長のはからいでカンボジアの子どもたちは授業と給食を体験することになった。

ポルポト政権時代の負の遺産で十分な教育を受けられていないカンボジアの子どもたちにとっても日本の教育を知ってもらい、我が地域の小学生にも遠い存在だったカンボジアを身近に感じてもらえるだろう。

また同年の冬休みには4泊5日で我が家の子どもたちと私たち夫婦と職員とでカンボジアのノリア孤児院に行き交流をしてくる。日本が如何に恵まれているか。また反対に、カンボジアの子どもたちと交流することでカンボジアの子どもたちのピュアな心に触れて物質的に貧しくても心の豊かさやカンボジアの良さ、平和の大切さを知ってもらうためだ。

社会的養護児童には、ともすれば不遇な生い立ちや環境を怨み、社会を怨み、成人してもニートやホームレスになっている人を見聞きする。

しかし、当ホームの子どもたちは幸いにも近隣地域の人たちを始め、国内はもちろんのこと呉市国際交流センター職員のおかげで広島県内の小・中学校のアシスタント・ティーチャーを初め諸外国の人たちとの交流がある。時折我が家に来てくださり英語で子どもたちと遊んでくださる。子どもたちも彼らが来るのを楽しみにしている。

また、毎年開催地を変えてのファミリーホームの全国研究大会にはその都度子どもたち全員を連れて行って見聞を広げている。

そして、当ホームは密室にならない環境に努めている。3名の発達障害の専門家の方に第3者委員になっていただき、子どもたちがいつでもSOSを発信できるように心がけている。そのおかげで、どの子も明るくて優しくておおらかである。岩田亮子さんを始め善き先輩たちを見

習って世界貢献、社会貢献ができる大人へと成長してくれることを願いつつ、私自身も努力を惜しむことなく子どもたちの養育に頑張っていきたい。